# 苑さん

イチ

西日が差し込む放課後の部室、窓際まで引いたパイプ椅子に、苑（エン）さん、もとい俺の想い人、実のところただの部活の後輩、一見すると黒髪の美少女、つぶさに見てもやっぱり美少女、人呼んで２‐Ｂの保健委員、父（大手文房具メーカー勤務）、母（某大学付属病院医療事務）、姉（バド部、理系、たぶん美人）そして弟（小三のオスガキなぞ大抵は糞だ）と共に松尾鮮魚店の裏手に暮らし、まるでアルカディアの清廉な白百合の花、若しくは虞妃も嫉む朝露の碧玉、俺の未来のお嫁さん（なんちてｗｗ）、そして入部から二週間がたつのに未だ話かけられずにいる後輩……が座って、静かに本を読んでいる。

恐ろしいほどの静寂に、微かにこだまする鴉の鳴き声が空々しい。

小学生の頃は隣に座る女子を全員好きになっていた恋多き俺であったが、もういい加減一途な愛というシロモノも多少は身に着けていた。つまりこの十二月からは猛烈に苑さん一筋であり、大得意のルパンダイブをかましたいところではあるが、実際はとてもそんな勇気はなく、更に常人にはあんなに高く飛び上がることはできない。加藤一彦は大衆を惑わしているのだ。

なんといっても、十二月、というのがミソなのである。二年の冬という微妙な時期に入部してきた苑さんの胸中ははかり知ることができないが、とにかく俺にとっては願ったり叶ったり、夢にまで見た季節行事が目白押しなのだ。寒さで頬を真っ赤にした苑さんに「待った？」なんて声をかけて、そんで首筋に手をやってひゃーっやめてよ～っていうやつをやって、あと当然クリスマスにはどっか良いところに連れて行って、年越しの瞬間は苑さんと通話して過ごし、もちろん初詣にも行ってめちゃんこ可愛い苑さんが着物姿を見せてくれて、そんで……。

しかし現実は非常なるかな、ぐずぐずやっているうちに未だ一度も言葉を交わしていないまま、はや二十一日の金曜である。明日からは週末に入るので、可及的速やかに苑さんと親しくなって告白に漕ぎつけなくては、来たる二十四日に間に合わない。

今日こそは、そう、今日こそは苑さんに話しかけようと剛腸石心の構えなのだ！

とはいうものの、この第一声が俺と苑さんとの長い長い愛の物語の初めのページを飾ることとなるのだ。半端

な覚悟ではいけない。

「何読んでるの？」は？　おまえ誰？　いきなり話しかけないで貰えます？

「良い天気だね」……そっすね（シラーッ）。

「一五七二年のベステロース勅令に関して、セリグマンは宗教改革との関連性を指摘しているんだけど、君はどう思う？」いまどきセリグマンの通時的神学って（藁）。彼の説を未だに有り難がってるのは懐古趣味のスウェーデン人だけですよ。

「……君が好きだ」先輩…実は、私もずっと前から……

「え、まじ⁉」はい♡　電柱の陰から先輩のことずっと観察していて、家には収集した先輩の爪と呼気の詰まった瓶が山積みに……

……流石に引くわ、苑さん。

　清純派だとばかり思っていたのに、実際の君がこれほどイカれていたなんて。俺ほどの傑物であっても、君の気持ちを全て受け止めきれるとは……いや、苑さんを狂わせてしまったのは俺の責任なのだから、日本男児たるもの、もとい一般意思による信託の下日本政府に納税している民主主義の信奉者たるもの、これしきのこと、広い度量で以て受け止めなくては如何！

　手にその柔らかさが伝わってきそうなほど詳細に狸の皮を思い浮かべて独りニヤついていた俺だったが、視界の端で何かが動き、苑さんに関してはとんでもない目敏さを発揮する我が双眸がとらえたのは、ページを捲って本を持つ手を組み替えた苑さんだった。

苑さんっっ‼‼‼‼（懊悩煩悶鼻血噴出即死案件）

失敬して、もう一度叫ばせていただく。

苑さんっっっっっ‼‼‼‼‼

喉も裂けよとばかりに、これが最後である。

苑さんっっっっっっっっっっ‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼

……ふう。顔の角度が変わって左半分だけでなく右半分もちょっと見せてくれたので、思わず我を忘れてしまった。

　いつの間にか部室内を満たすエル・ドラドの斜陽は、室内の数多くの備品（恐ろしくも飲みさしのペットボトル、謎のテニスラケット、誰かの教科書）と苑さんをかたどって、悩ましく複雑な影を落とす。無造作に置いた俺の手のすぐ近くまで苑さんの影が伸びてきていることに気づき、忽ち緊張に喉が詰まってしまった。

嗚呼、今すぐ俺の体が解けて明朝体の活字となって、お砂糖とスパイスと素敵な何かでできた君の脳内をこっそりお散歩できたら良いのに。成績表と、昨晩のママの手料理、乗り遅れてしまった通学バス、そんなものに挟まって、麗らかなるニンフェットの幽囚としてブラックホールの最奥に閉じ込められるとも、それが本懐である。

ところで、ブラックホールは一九十五年にシュヴァルツシルトが初めて理論的な仮説を立てた、物理学者にとっては蜘蛛の糸ともヨトゥンの後裔ロキともいえる光をも飲み込む驚異の天体である。二〇一九年ＥＨＴ（Ensan Hontoni Taisuki）によって初めて直接撮影に成功したブラックホールは、なんと100,000,000,000㎞と判明し、そのあまりの恐ろしい事実に日本は改元を決意した。ブラックホールに吸い込まれると、四次元空間に辿り着くとも、ホワイトホールから射出されるとも、二人に分裂するとも、お歴々の大学者サマが殴り合っている（ホーキング博士は多分飛車角落ち）わけだが、何れにしろ恐ろしい。バイオのワン隊長みたいに死ぬよりも、更に宇宙は絶大で恐ろしい。宇宙ヤバイ。

もし死ぬのなら、話は戻るが、苑さんの白く華奢な細腕で絞め殺されるのなら、まあ悪くない。一生懸命腕に力を籠める苑さんもきっと可愛いだろうし、むしろそうして欲しいというか、是非ともお願いしたいというか、墓石に「死因：我が愛しのハニー」と刻みたいというか、苑さん、君の手にかかって俺はここで今すぐ死にたい！

「お疲れ様です」
「あ、はい」
苑さんは帰った。